



書評『クリエイティブ資本論』

新たな経済階級の台頭

リチャード・フロリダ著 井口典雄訳

7月の夕暮れ迫るなか、巨大なイベントホールの前には、講演が始まるのを今や遅しと待ちわびる多くの聴衆が長蛇の列をなしていた。併設イベントの集客と比べても、その関心の高さが窺い知れる。会場に集まった聴衆の出立ちも背広姿のビジネスマンもいれば、Tシャツにジーパン姿のクリエイター風の若者もあり、多種多彩である。会場には、すでに立錫の余地もないくらい多くの観衆が集まっており、その視線を集めるなか、リチャード・フロリダ教授は壇上に現れた。この都市経済学者は、熱のこもった力強い口調で「クリエイティビティ」の重要性と「クリエイティブ・クラス」という新しい経済階級の台頭が、社会に与えている影響について語り始めた。彼によれば、クリエイティブ・クラスは、1990年以降大きく拡大し続け、21世紀を迎える頃には米国における労働力の3分の1を占めており、彼らの生み出す富は、米国の全労働者所得の半分を占める1.7兆円にも及ぶという。いまや、米国における経済成長と都市の興隆は、いかに彼らクリエイティブ・クラスが居住しやすい環境を提供し誘致できるかということにかかっている。

このクリエイティブ・クラスとは、どのような人々を指しているのか。また従来の社会階級である「ワーキング・クラス(単純労働者)」と「サービス・クラス(サービス従事者)」とはどのように異なるのだろうか。フロリダは本書のなかで、科学者、技術者、芸術家、音楽家、デザイナー、知識産

業の職業人などの「意義ある新しい形態をつくり出す」仕事に従事している人々をクリエイティブ・クラスと定義している。ドラッカーは、「ポスト資本主義社会」(1993)のなかで、知識こそが意味のある資源であると述べたが、一方フロリダは、「知識」や「情報」は単なるクリエイティビティ(創造性)の道具や材料にすぎず、これらを用いて構築されるクリエイティビティこそ、社会や環境に働きかけ、変化を及ぼす競争優位の源泉であると論じている。さらに、従来の社会階級であるワーキング・クラスやサービス・クラスとの違いについてフロリダは、これらが予め計画された業務を遂行することで対価を得るのに対して、クリエイティブ・クラスは、自律的にかつ柔軟に何かを創作することで報酬を得ており、この点において既存の階級とは一線を劃するという。

フロリダによれば、クリエイティブ・クラスの台頭は、先進工業社会全体に見られ、大きな二つの価値観の変化に起因しているという。一つは、「伝統的」な価値観から「世俗的」な価値観への移行であり、もう一つは、「生存」の重視から「自己表現」への価値観の移行である。特に1990年代に横行した企業施策としての大規模な人員削減は、旧来の会社に対する帰属意識や個人と社会との価値観を大きく変化させた。クリエイティブ・クラスは、安全と安定を自律性と引き換えに、自らの生活、時間、仕事の選択をもコントロールすることで自由を手に入れようとしている。クリエイ

イティブ・クラスは自らの帰属意識を、勤務する会社にはなく、自らの趣味や副業、ライフスタイル、居住するコミュニティのなかに求め、自己表現や主観的な幸福、生活の質を追求するのである。

彼らクリエイティブ・クラスは、仕事にせよ、副業や趣味であれ、自由かつ主体的に創造性を育むような活動であれば好んで参加する。彼らは制約された時間の中で「固い絆」や長時間拘束されるような活動を嫌い、より効率的に多彩な経験が得られる活動に参加しようとする。それらは地元に着した多様な文化活動への参加であったり、アウトドア活動への参加であったりする。彼らは、こうした活動による「弱い絆」を多く持つことによってさまざまな刺激を受け、多様な新しいアイデアを吸収し、それらを合成しながら創造性を高めているのである。こうしたクリエイティビティと多様性の結びつきが新たな才能を引き寄せ、ハイテク企業を生み、結果として地域の成長に拍車をかけるという。

米国における地域社会の成長や繁栄は、既述の通り有能なクリエイティブ・クラスを惹きつけ、彼らが生み出すクリエイティビティを確保することによって実現される。フロリダは、長年の実証研究で都市が繁栄する条件として、三つの「T」 - すなわち、才能 (Talent)、技術 (Technology)、寛容性 (Tolerance) の三つの要素を兼ね備えていることが必須条件であるという仮説を設定し、これを検証するためにいくつかの代理変数を用い、クリエイティブ・クラスが都市の成長や繁栄に貢献すること明らかにしようとした。この過程で、彼は都市のクリエイティビティを測る指数である「クリエイティブ指数」が、都市における同性愛者の割合を測定する指標である「ゲイ指数」と強い近似関係にあることを発見した。米国に

おいて同性愛者は、依然としてマイノリティである。彼らは周囲の偏見や蔑みから開放され、受容してくれる社会環境へと移動する。このようにして彼らが行き着いた落ち着ける場所 (都市)こそが、多様性や開放性に富む場所であると想定し、「ゲイ指数」に「メルティングポット指数」、「ボヘミアン指数」に加えた合成多様性指数を用いて、都市の多様性や開放性がいかに都市の繁栄に貢献しているかということを導き出そうとした点だが、フロリダ研究グループのユニークな視点である。

フロリダは、クリエイティブ・クラスが経済成長に貢献する存在であることを明らかにする一方で、こうしたクリエイティブ・クラスの興隆が、「固い絆」をベースにした伝統的なコミュニティとの間に新たな軋轢を生み、米国のあらゆる地域でクリエイティビティを持てる者と持たざる者との間で対立が深まり、地域間の経済格差が顕著になってきていると指摘する。クリエイティビティを吸収し繁栄する都市が出てくるなか、都市の光彩を失い没落していく都市もある。このような社会階層による地理的分化が、全米では急速に進んでいる。フロリダは、未だにスタジアムや博物館の建設という手段で、都市の豊かさを示そうとする都市が多くあることを痛切に批判し、これらに投じられる財源は、クリエイティビティが創出されるような環境作りに充てられるべきであると主張する。そのうえでフロリダは、このような伝統的なコミュニティとクリエイティブ・クラスを中心とした新たなコミュニティとの間の対立と経済格差の解消には、多くの人々がクリエイティビティの恩恵を享受できるようクリエイティブ経済に組み込まれることが重要であり、そのためにクリエイティブ・クラスは自らの立場をよく認識して、道義的な責任を果たすべきであると結んでいる。

以上がフロリダの研究の要点であるが、こうした彼の研究の意義と課題について二つの視点から評しておこう。一つ目の視点は、企業立地という論点についてである。フロリダは、本書のなかでハリウッドやシリコンバレーを引き合いに出し、「場所」が企業に代わって、才能や技術を磁石のように惹きつけ、アイデアや企業を生み、どこに企業を設立するかがその後の企業の成長の決定的要素であると述べている。このため、米国では人々が仕事のために移動するのではなく、企業が優れた人材や技術を持つ地域に移転するという逆転現象が起きているという。これまで経営学では、原材料の調達や大規模消費地を抱えているかといった市場との関係が、企業立地を決める重要な要件とされてきた。また人材の確保と知識資本の蓄積は、企業の立地ではなく、組織における人材育成や知識管理の問題として扱われてきた。フロリダのクリエイティブ資本論は、従来の社会資本論ないしは人的資本論に対して、真っ向から意義を唱えるものである。異なる視点からクリエイティブ人材の確保とそのための環境づくりが企業の競争優位につながるという提言は興味深いが、本来、競争戦略の要諦とされる企業風土の醸成やクリエイティブな人材の育成、そしてそのような資源をどのように配分して企業全体の戦略として機能させるかという部分は一切言

及されておらず、経営学的な観点からはかなり異論が残るところである。

第二の視点は、米国で進行しつつあるクリエイティブ経済の実情が、果たしてわが国に適用できるかという点である。わが国では、近年、人材の流動性が高くなってきたとはいえ、現在もなお、終身雇用が雇用慣習となっており、会社への帰属意識は依然として高い。また、成功の機会を供し世界中から優秀な人材を集め、自由競争のなかで発展してきた多民族国家である米国と比べると、わが国は多様性や開放性の部分でははるかに劣後する。フロリダの主張するクリエイティブ資本論が、普遍的かつ唯一の都市や社会が繁栄するための道程であるとするならば、わが国の社会政策は大きく転換せざるを得ないであろう。

本書では、米国の都市の成長と繁栄という点に焦点があてられた議論が展開されているが、フロリダの独創的な理論をさらに発展させるためにも、今後はユニバーサルな視点に立ったクリエイティブ・クラスの国際比較研究などの領域にも、研究の枠組や対象を拡張して行く必要がある。また、フロリダの研究を批判的に検証するとともに、わが国の実情に合わせた都市の繁栄とクリエイティビティの深耕に焦点をあてた研究が、今後精力的に取り組まなければならない。

(小倉賢治)